

藝大通信

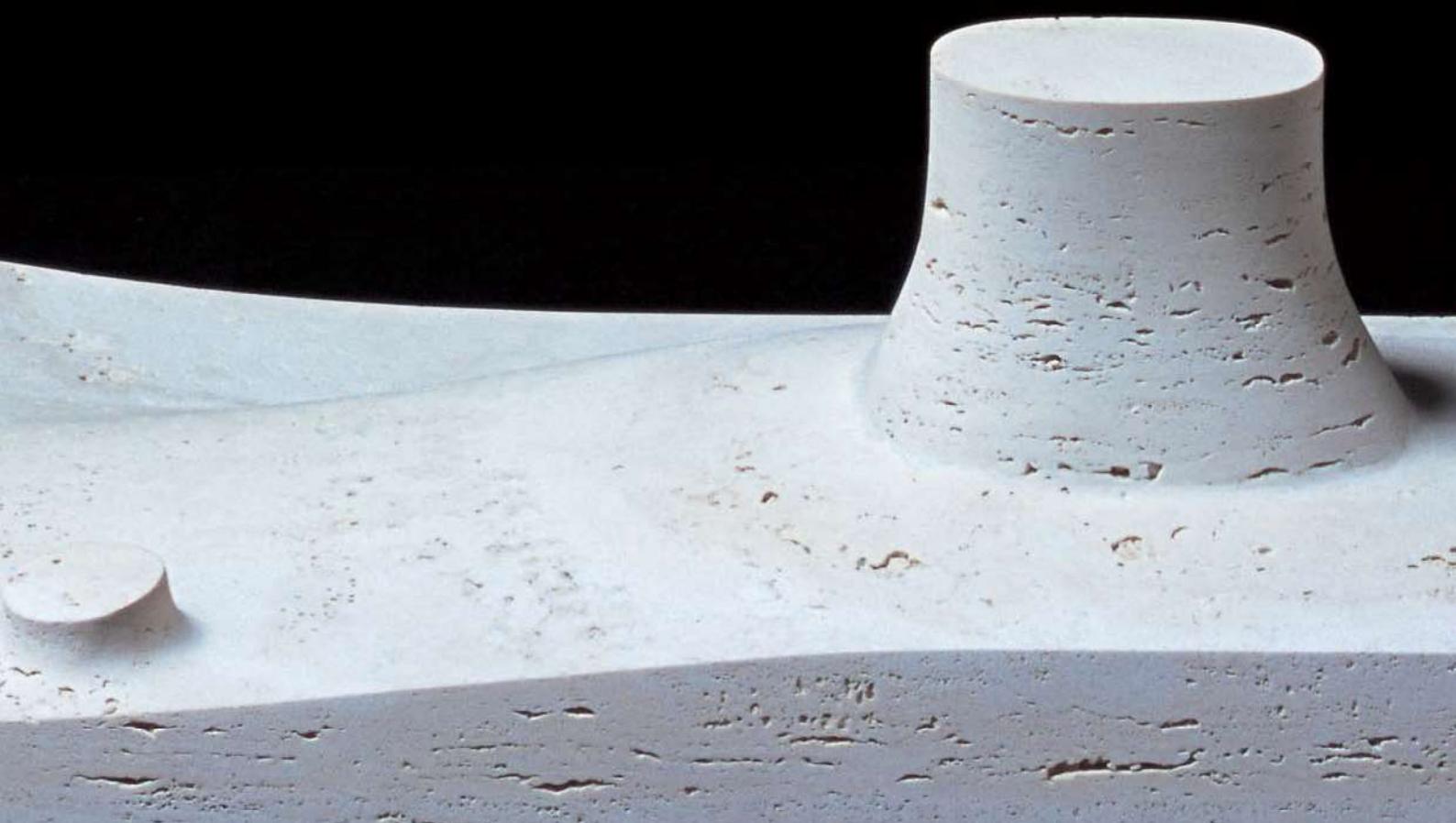
09
OCTOBER
2004

TOKYO
GEIDAI
東京芸大広報誌

特集 留学生、芸大を語る
私たちなぜ、芸大で学ぶのか

新連載 芸大の歩き方
上野の杜のキャンパスガイド 第1回「門」

新企画 教員は語る
芸大への期待・抱負・提言 篠内佐斗司×関根知孝





「Versilia '02」トラバーティン・石彫 22×186×51cm
「第2回コンスタンチン・ブランクーシ賞」大賞受賞（2004年）
(撮影 松田瑛二)

山本正道（やまもと・まさみち）

1941年京都府生まれ、1965年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。67年同大学院修了。80年彫刻科講師、86年助教授、95年から教授。自然という彫刻家にとって極めて難しい主題をとらえた作品は、遠い記憶のなかの風景を思いおこす力があると評されている。大賞を受賞した講評では、素材であるトラバーティンはブランクーシが好んで使用したものとされ、素朴で農民的な精神と相通じるものがあり、現代彫刻の新しい方向を示すものと支持を得たという。

第9号目次

3....13 特集

留学生、芸大を語る

私たちなぜ、芸大で学ぶのか

レベッカ・ミリマン／王 佳／フローニ・フリデリケ・カウチ／
スティーヴン・ドミニク・エレリ／李 恩敬／メリオ・イザベル

留学生の受け入れ 今後と現在 根木昭

14....15 新連載

芸大の歩き方

上野の杜のキャンパスガイド

第1回 門 布施英利

16....17 タイムカプセルに乗った芸大

【第9回】1981～90年

佐藤道信 〈東京芸術大学美術学部1983年〉

瀧井敬子 〈東京芸術大学音楽学部1985年〉

18....21 教員は語る

芸大への期待・抱負・提言

籾内佐斗司×関根知孝

22....23 NEWS2004.4～2004.8

編集後記

東京芸術大学広報誌
藝大通信 第9号

編集発行
東京芸術大学藝大通信編集部

編集委員
船山隆（音楽学部楽理科教授・編集長）
長谷部浩（美術学部先端芸術表現科助教授）
布施英利（美術学部助教授美術解剖学研究室）
安藤政輝（音楽学部邦楽科助教授）

アートディレクター
蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）

制作
株式会社 平凡社

発行日
平成16年10月31日

お問い合わせ先
東京芸術大学総務課
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 03-5685-7509 FAX03-5685-7760
e-mail toiawase@ml.geidai.ac.jp
URL <http://www.geidai.ac.jp>

Vroni
Friederike
Kautzsch

Wang Jia

Rebecca
Milliman

特集

留学生、 芸大を語る

—私たちはなぜ、芸大で学ぶのか—

世界各地から日本を訪れ、芸大で学んでいる留学生たちが
どのように考え、何を目指しているのかをインタビューした。
異文化が交わることで生みだされる、芸術教育のすがたとかたち。

Mairiaux
Isabelle

Ri Un Kyon

Stephen
Dominic
Ellery

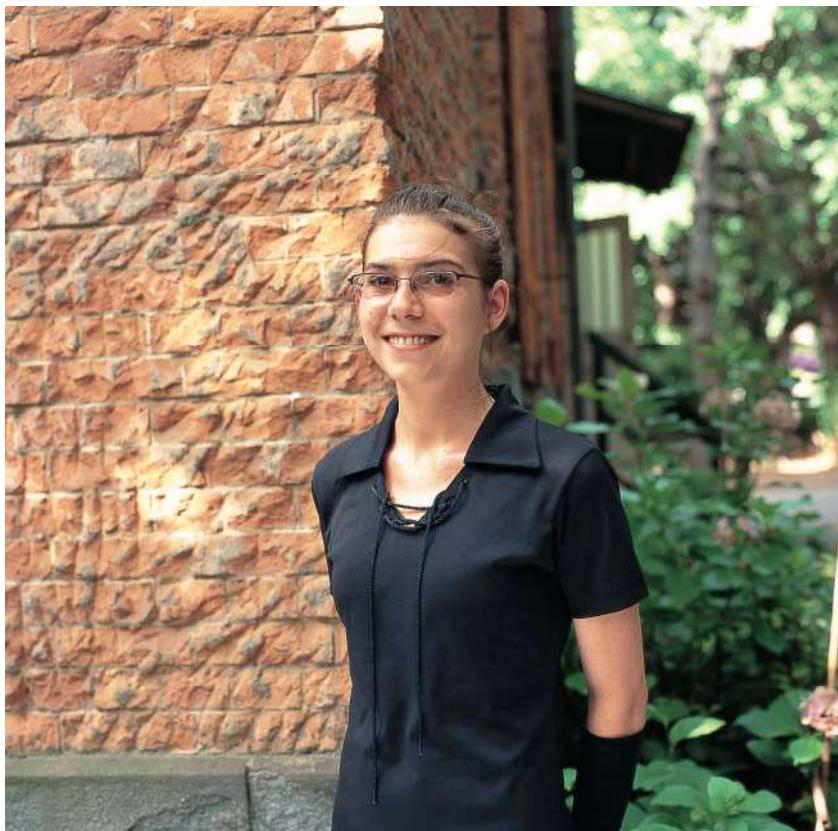
Rebecca Milliman

レベッカ・ミリマン

[アメリカ]

修士(油画)1年

日米の文化を、
双方向性をもってコミュニケーションしていく。



アーティストに生まれ、幼少期を過ごしたのですが、五歳のときドローイングのコンテストで賞をとつて以来、芸術家になることを夢見ています。一六歳のころ、近くに住んでいた陶芸家と知り合いになり、初めてアジアの芸術について知ることになります。そして、この先生の強い勧めもあってニューヨークの大学に入学して、陶芸を専攻することになる

のですが、陶器の起源を調べていくうちに、日本と日本の芸術に出合つたのです。当時は、日本の文化をより詳しく知りたいと思つて、日本のデザイン雑誌を集めたりしていました。陶器で博士号を取得した後も、日本についての研究意欲は強くなるばかりで、コーン威尔大学の修士課程で、アジア学の日本語のプログラムを勉強しました。そして日本へ行くことを決意して、二〇〇〇年には京都へ移ります。

京都では、伝統的な町家に住んで、清水焼の工房で陶芸を学びながら独学で絵の勉強を始めるとともに、木屋町にあるビルでライブ・ペインティングのイベントに参加するといった活動も開始しました（この活動は、東京に移った現在も続けています）。芸大に入ったのは今年からのですが、絵画の技術をより高めたいと期待したのと、日本の大学のなかでもとくに日本の芸術を詳しく知っている先生方がいらっしゃると思ったからです。

私の目標は、日本文化を英語で紹介するとともに、アメリカ人の絵画に対する考え方を日本人に伝えることができればということです。日米の文化を、双方向性をもつてコミュニケーションしていくために役に立つことができれば、素晴らしいことだと思つています。

もちろん、自分自身の創作活動においては、日本の芸術文化をより深く知ることで、作品世界を充実したものにしていきたいと思っています。

芸大

大の姉妹校である清華大学の前身中央工芸美術学院でプロダクトデザイナーを勉強していました。卒業後、父が筑波大学のプロダクトデザイン専攻出身ということもあり、この分野での日本の技術の優秀さ、そして私自身日本文化に興味があり、

現代の情報化社会に対応するプロダクトデザインの研究を日本の大学ですることを決めました。

多摩美術大学の情報デザイン学科に進み、

よりヒューマンインターフェイスに重点をおいた情報化デザインを研究しました。視覚障害者の方が「WEARABLEコンピュータシステム」に近づくと、そこからさまざまな情報が得られ、都市のなかでも積極的に行動することができるシステムを研究しました。そしてこの研究を推し進めていくうちに、都市でのコンピュータと人間の関係環境、建築の知識がないと研究開発が進まなくなる。目に見えないものと現実の結合、MR技術(Mixed Reality)を生かし、ランドスケープ的な建築技術を勉強したいと考え芸大に入りました。

そこで現在の指導教員である六角先生に出会ったことが自分の研究をより深めることができたきっかけとなりました。先生ご自身、東洋伝統哲学、「晏茶羅」等を建築に結びし、文化への造詣の深さにも大変惹かれるものがありました。

私にとって先生の力強いご指導のもと、芸大については、私のような研究をしてい

る学生にとつては設備の面で少し物足りないと感じる部分があります。一つの提案をして、取手校地とのコミュニケーションがよりスムーズになればそういう面の問題も解消されるのではないか。

これからも東京芸術大学の学生の一人として先生、友人との出会い、自分のまわりの環境に感謝し、更に研究に力をいれて頑張っていきたいと思います。

Wang Jia

王 佳

[中国]

博士（建築設計）3年

ランドスケープ的な
建築技術を勉強したい。



Vroni Friederike Kautzsch

フローニ・ フリデリケ・カウチ

[ドイツ]

修士(保存修復・工芸)1年

自然の形象と本質的特徴だけで
表すことができる日本文化。



私は最初、バレエの勉強や、ドイツの歴史・美術・哲学を学んでいました。一九九八年からミュンヘンの国立民俗学博物館で保存修復研究を始めたのですが、芸術に興味はあっても自分自身でつくることにはあまり惹かれませんでした。保存修復の道に進んだのも、過去の優れた芸術作品に触れながら、美術史よりも深く、その

技術を知ることができたからです。この博物館では油画・彫刻・フレスコ・染色・樹脂の全てにわたって研究をしました。一七世紀につくられた教会の祭壇に塗られた樹脂を復元することもあります。その後、ドイツやスイス、バーゼルの博物館や修復工房で仕事を続けたのですが、キリスト教藝術に深く携わることに限界を感じ始めていました。そこで、自分が修復にかかわってきた経験のなかで、最も印象に残っていることは何か思い返してみたのです。

ミュンヘンの博物館で修復したもののかに、漆塗りの駕籠がありました。シーボルトが日本からもたらしたものだったので、その多様な技術(漆・日本画・染色)を思い出し、日本でしかできない全体的な勉強をすることを決意したのです。

日本の文化は私たちの眼から見ても、ただエキゾチックなだけではなく、すごく奥が深いものがあると思います。たとえば物語の一場面を、日本の漆芸では一人の登場人物を描くことなく、自然の形象と本質的特徴だけで表すことができるのです。

芸大に入つて二年。個人的にも最近、茶道を習い始めるなど、どんどん新しい世界が広がっています。目的やゴールに向かって進んでいくヨーロッパの文化と異なり、歩きながらさまざまな物事を考えていく日本文化は、まだまだ奥が深いと実感しています。

一九九五年以降、南米、ロシア、フランスを中心に世界各地の劇場でオペラや交響曲を指揮しています。なかでもペルーは、アレキパ交響楽団で芸術監督を務めるなど、最も積極的な活動拠点の一つといえるでしょう。

イギリスのエクスターというところで生まれ、八八年にはバーミンガム音楽院をグラリネットと作曲で卒業。その後、各国の奨学金を得て、ポーランドのクラコフ・アカデミー・ヨロシアのサンクトペテルブルグ音楽院で学ぶことになりました。サンクトペテルブルグ音楽院では世界的に有名なイリヤ・ムーアシン教授について、大きな影響を受けました。芸大に来たのは九八年で、現在はマーラーの交響曲を研究しています。

ムーアシン先生の指揮と教育のスタイルは、一言でいえば「パッショナータ」。音楽は心の中にあるものは表現できるが、心のなかにないものは表現できない、ということです。心の中で燃える「火」が、音楽を生み出す。これはどこの国においても変わりません。しかし、その中身が国民性によって異なるのです。ヨーロッパでも、国境が接していても国民性や文化が違う。日本の場合、音楽を生み出す心は、たいへん繊細な感性によって裏打ちされています。武満徹の音楽には、それがよく感じられます。ヨーロッパの音楽家でも、ドビュッシー、ラヴエル、プッチーニらは、日本文化に触発されて曲を生み出しました。私がさまざま

まな国で演奏し、さまざまな国で音楽を学ぶのも、世界各地の多様な文化や心を知ることで、指揮をするうえで、知識の面でも、感性においても豊かになれると思うからです。

Stephen Dominic Ellery

ステイ文・ドミニク・エレリ

[イギリス]

博士（指揮）3年

繊細な感性によって裏打ちされた日本人の音楽性。



私は四歳からピアノを習い始め、ピアノリストを目指していたのですが、一七歳の時音楽の先生が勧めてくれたオペラ『椿姫』の舞台に出会つたことが、オペラ歌手を志すきっかけになりました。それでも、学校の重唱団でピアノ伴奏をしながら歌つていると、私の声のほうがよく目立つといったこともあったので、歌の道に進むことにあまり迷いはありませんでした。

韓国でも音楽大学に通いましたが、より広い世界に出会うことを夢見た私は、学校を中退し留学をする決心をしました。音楽のなかでもオペラはドイツ、イタリア等ヨーロッパからの芸術物であるため、ヨーロッパで勉強するという選択肢もありましたが、當時一九歳である私は叔父がいる日本のほうが環境面での不安がないし、日本にはヨーロッパやアメリカからの著名な演奏家と

先生がくるという話を叔父より聞き、ヨーロッパと比べて遜色のない日本での勉強を決意し、一九九一年から東京の武蔵野音楽大学に入学しました。

ここでは高名なエレナ・オブラズツォワ先生をはじめとした方々に歌の基本を習いました。オブラズツォワ先生のお蔭で、在学中の、九四年にはロシアのボリショイ歌劇場で『道化師』でデビューを果たすこと

Ri Un Kyon 李 恩敬

[韓語]

博士(声楽・ソプラノ)2年

韓国と日本とヨーロッパで学んだ経験を生かす。



もできたのです。

その後、イタリアのミラノに留学し、のんびりした性格ではなかつた私は世界一のソプラノ歌手だつたレナタ・スコット女史とモンセラ・カバリエ女史のコースに参加し、数々の国際声楽コンクールにも入賞できました。しかし私は東洋人だという理由もあって自分に一番似合う役は東洋人が主人公であるオペラ『蝶々婦人』の蝶々さんであるが、誰よりも綺麗な蝶々さんを演じるためには日本をもつと正確に理解する必要があると思い日本に再びくる決心をしました。芸大に入り多田羅迪夫教授の下で研究をしています。

私は、東洋の文化に大きな違いはなく、歐米の文化が入ることによって、国ごとの違いができたのではないかと考えています。日本には、ヨーロッパやアメリカの文化が早く入つたので、中国や韓国との違いが生まれたのではないでしょうか。私は幸いにして、韓国と日本とヨーロッパで学び、それぞれの地域の文化に触れることができました。これからはこの経験を生かして、音楽を通じた架け橋になりたいと思っています。

私

の芸大での研究分野は「日本における音楽療法の現状分析」です。音楽療法とは、音楽の働きを用いて、心身の障害の回復や機能の改善を図る研究実践です。

今年から芸大に留学してきたのですが、ベルギーにいると、アジアの音楽療法の現状が入ってこないということが大きな理由でした。

音楽療法の分野では、国や地域ごとにさまざまな実践や取組みがなされています。

イギリス、アメリカ、フランス、アルゼンチンが先進的な国で、日本の音楽療法もアメリカから輸入されたものが中心です。そこで私は、日本独自の音楽療法がないかを探しているのです。たとえば伝統的な邦楽を用いた音楽療法が存在しないか調査しているのですが、まだ見つかっていません。

留学先に芸大を選んだのは、作曲家の友人が、芸大には邦楽の優れた先生が集まっていると教えてくれたからです。邦楽の基礎を学べる講座を一科目受講していますが、これからはたとえば神楽などを自分で見てまわりたいと思っています。

ベルギーにいたとき日本について知っていたのは、歌舞伎・能・お寿司……といったことくらい。新聞に載っていることも、経済問題やシリアルスな話題ばかりで、日本の日常生活はヨーロッパではほとんど知られていません。でも、日本人もヨーロッパに対してもう少し同じだと思います。

日本に来ておもしろいと感じたのは、短

期間に大きな変貌を遂げたためか、世代によって趣味が違い、聴く音楽も全く異なります。だから日本の音楽や日本人についてどう思うかと尋ねられても、一概に答えることはできないでしょう。

また芸大の学生はさまざまな面でハイレベルなので、そこだけで日本についての判断はできない。だから芸大の外の世界にもしっかりと目を向けて研究活動を続けていこうと思っています。

Mairiaux Isabelle

メリオ・イザベル

[ベルギー]

修士(応用音楽学)1年

日本独自の音楽療法を探すために。



留学生の受け入れ —現在と今後—

根木 昭

二〇〇四（平成十六）年五月一日現在、本学の留学生は一〇四名を数えるに至りました。昨年度まで三桁であったのが、今年度にはじめて三桁の大台に乗ったわけです。男女の内訳は、男四一名、女六三名で、（日本人学生と同じく）数の上では女性上位になっています。また、美術関係の専攻と音楽関係の専攻を比較しますと、前者が七九名、後者が二五名で、美術関係の留学生が音楽関係の留学生の三倍強を占めています。なお、本学の留学生は、その大半が大学院レベル（研究生を含む）に在籍しているのも大きな特色といえます。出身国を多い順にみると、いちばん多いのが韓国の三八名、次いで中国の一五名、その次が米国の八名となっています。その他の国々は、おおむね一～四名ですが、図にみるように、アジア、オーストラリア、中近東、ヨーロッパ、南北アメリカと、アフリカを除く世界のほぼ全域にわたっています。

本学は、一八八七（明治二〇）年の東京美術学校、東京音楽

学校の設立以来、今日に至るまで数多の著名な芸術家、研究者を世に送り出して来ました。このような過去一二〇年近くにわたり歴史と伝統、および教官・卒業生の国内外にわたる精力的な活躍とがいまつて、全世界から多くの留学生を本学にひきつけてきたものと思われます。一方、本学も、今年の四月から国立大学法人に移行し、新しい出発の時を迎えた。私見ですが、今後本学としては、アジアにおける芸術の拠点大学として、アジア各国の芸術系大学からの求心力をさらに強めつつ、他方で欧米の芸術系大学に対峙していくくことが必要かと思われながら、新たな国際的展開を図っていくことが必要かと思われます。今後の留学生対策は、このような長期的戦略と密接に関係しており、国際交流室を中心とするこれから議論と方向付けに期待しているところです。

差し当たり、留学生の受け入れに限つて考えますと、アジアをはじめとする欧米以外の国々からは、わが国の伝統的な芸術



長野への旅行時の集合写真

文化、欧米から受容した芸術文化のいずれの分野を問わず、幅広い受け入れを行つていくことになるでしょう。また、欧米系の諸国からの受け入れは、伝統的な芸術文化の分野が中心になるでしょうが、欧米起源の芸術文化でもわが国が先端を担つてゐる分野に関しては、積極的にその受け入れを図つていくべきものと考えられます。これまでも、すでにそのような受け入れの構図ができ上がつておりますが、今後は、先の長期的な戦略とも関連しながら、受け入れの方針がより明確化されていくことと思われます。ただ、人的、物理的な制約から、受け入れにもおのずから限界があります。大学全体の発展の方向と歩調を合わせながら、今後適切な受け入れ数を設定していく必要があります。

留学生に対しては、懇親会や日本文化に接する機会を設けることなどを中心に、大学として毎年いくつかの催しを行つています。例えば、一〇〇四（平成十六）年度では、五月の「学長主催外国人留学生懇談会」、「日本文化体験Part1：自分の手にあつた漆のお箸を作ろう」、七月の「穂高町制五〇周年記念グローバルハートイン安曇野穂高」への参加、「外国人留学生原学旅行」、九月の「文化庁舞台芸術国際フェスティバル プレイベンツ未来の新星たち～留学生ガラ・コンサート」への参加がすでに実施済みであり、また今後、一〇月には「国際交流会館在館者と地域との懇談会」、一一月には「日本文化体験Part2：日本の音」、一二月には「日本文化体験Part3：茶の湯と日本文化」などを予定していきます。

七月の穂高町制五〇周年記念事業（一六～一九日）には、美術学部の三田村有純助教授（塗雲）の肝いりにより、留学生一人四人が期間中を通じて参加し、美術、音楽活動をはじめ、町民との芸術文化交流を行いました。また、見学旅行（一七～一八

日）もこの事業に合流し、旅行参加留学生三人が、先の一四人といもに、一夜、現地の人たちと楽しい交歓のひとときを過ごしました。また、九月の文化庁舞台芸術国際フェスティバルへの参加（五日）は、演奏藝術センターの松下功助教授（作曲）のコーディネーターにより、現役留学生一五人ほか留学生O.Bによる演奏及び企画協力によつて実施されました。

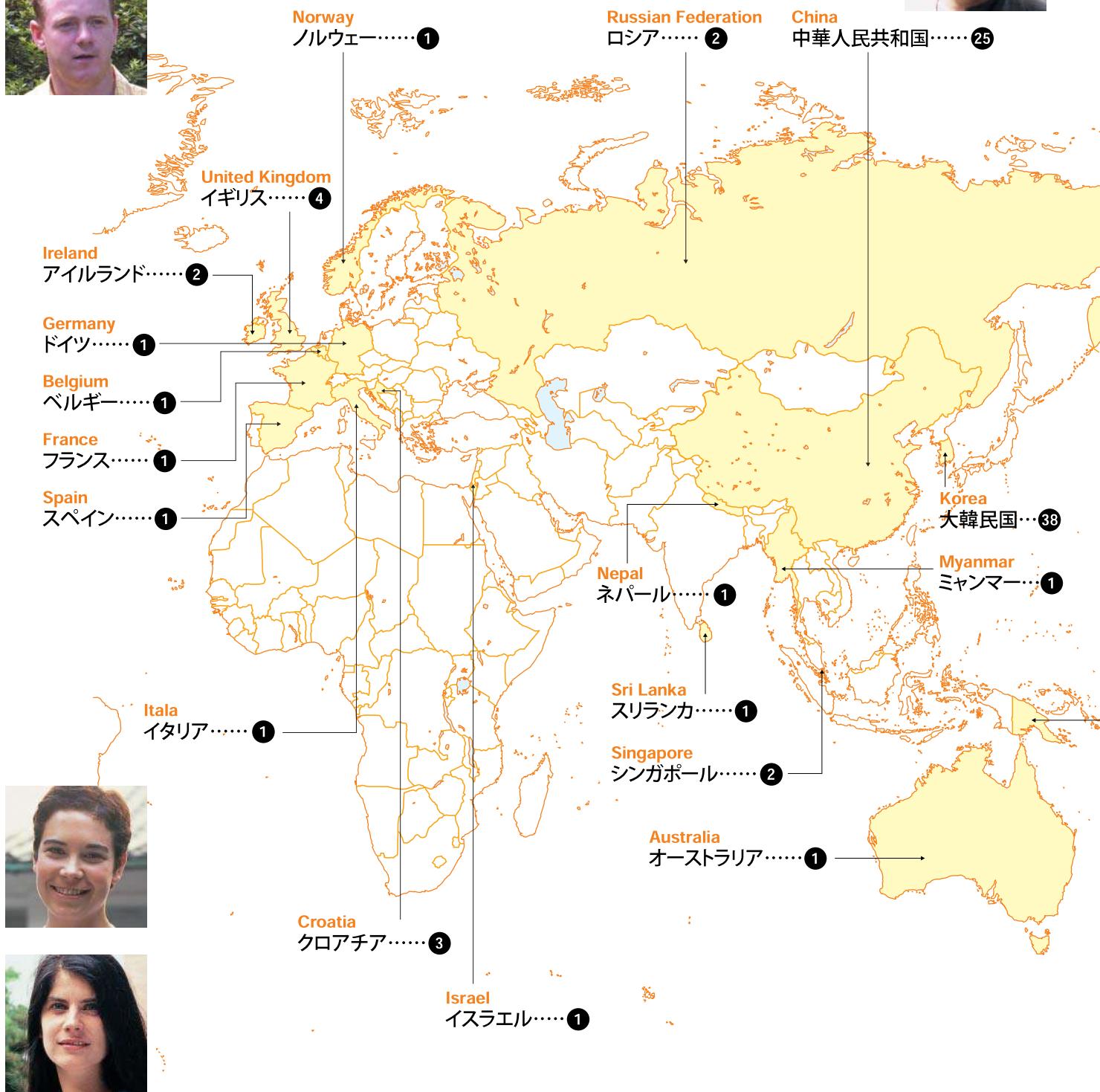
最後に、話を現実に戻しますが、留学生についての大きな課題の一つに宿舎の問題があります。本学には「国際交流会館」がありますが、单身部屋、夫婦部屋、家族部屋を合わせて三四室であります。また、入居期限も、ほかの留学生への均霑^{きんてん}を考慮し一年としております。また、大学村「東京国際交流館」では、单身部屋九室、夫婦部屋一室が割り当てられているに過ぎません。そのほか、石神井の寮にも一部の留学生が入つていますが、大学として用意できる宿舎の数は圧倒的に少ない状況です。民間アパートに入る場合は、礼金や敷金をめぐつてしばしばトラブルが生じているほか、保証人の問題があります。保証人については、大学としても考えなければなりませんが、国全体としても何らかの措置を講ずる必要があるのではないかと考えられます。なお、特に途上国からの留学生は裕福とはいえず、宿舎もさることながら、奨学金や授業料の減免など、ある程度の配慮を行うこととむこれから課題といえましょう。

以上、本学の留学生の受け入れの状況等について紹介しましたが、先にも述べましたように、本学の留学生対策は、今後ますます重要になっていくものと思われます。大学全体の国際交流の在り方の中で留学生の受け入れが明確に位置付けられ、その一環としての機能を十全に發揮できるよう、留学生センターとして努力していきたいと考えております。

（ねぎ・あきら／音楽学部教授・留学生センター長）

東京芸大外国人留学生 出身国別MAP





0 2000km

(単位は人。平成16年5月1日現在)

新連載

芸大の歩き方

—上野の杜のキャンパスガイド—

第1回★門

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る芸大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。



美術学部の門（①）の変遷
(大学美術館提供)

芸大の門見物ツアー 布施英利

「芸大の歩き方」の連載をスタートします。

これは芸大のキャンパス内にある庭や建物、そこに置かれた彫刻などの見所を説明していくものです。

今回は、第一回ということもあり、まずは「芸大への入り方」です。とはいえた試験生向けの、入試対策の説明ではありません（笑）。キャンパスへの入り口である「門」についてご紹介させていただきます。

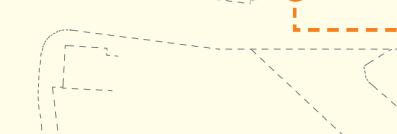
芸大には、たくさんの中門があります。上野キャンパスは、大学としては小さく狭いですが、なんと門は一〇もあります。キャンパスの周にそつて歩いてみると、門、門、門、門と続いている。ただし、たいていの門は閉じていて、普段は使われてはいません。しかし歴史的・建築的にみて魅力的なものも少なくありません。「芸大の門・見物ツアーアー」のお勧めのコースは、上野公園の旧奏楽堂前からのスタートでしょ。まず目に入るのが、美術学部のレインガの門（⑤）です。向かいには、かつて京成線の駅舎として使われていた建築も残り、いわば歴史を感じる美し



上野高校



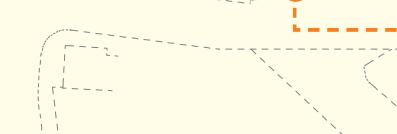
上野動物園



上野高校



都立美術館



い交差点です。このレンガ造りの門は、大正十一年につくられたもので、大学美術館の新設にともない取り壊されました。しかし、今年平成十六年に現在の場所に新たに移転されました。かつての美術学部を懐かしまれる方にはうれしい復活です。この門では、レンガと木と金属と、その素材のハーモニーも鑑賞してください。

次に、美術学部と音楽学部の間にある通りを歩道に沿つて歩きます。さきほどの門を手始めに、いわば「芸大門通り」の始まりです。正木記念館横を過ぎると、陳列館との間に、ギリシア建築か日本の古寺を思わせる立派な柱が連なる門は、現在は使われていませんが、かつて東京美術学校の学生がここを通っていました。芸大の伝統をいちばんに感じさせる門です。

さらに進むと、美術学部と音楽学部の門（①⑥）が向かい合っています。門の奥には守衛所があり、現在使われているものです。美術学部の門は平成十一年に大学美術館の開館にあわせて作られたモダンな門です。いわば平成の芸大を象徴しています。いっぽう向かいにある音楽学部の門は、大正十一年に作られました。こちらは芸大の伝統とアカデミズムを感じさせます。この向き合う二つの門、あなたはどうらがお好きでしょうか？

ともあれ、芸大の門には、その歴史と現在がこめられています。

さあ、門を入れると、そこが芸大です。

（ふせ・ひでと／美術学部助教授美術解剖学研究室）

一九八三年九月、砂漠の中に千年にわたって造営された敦煌石窟にて、本学の第一次学術調査団が到着した。シルクロードから遠く日本の法隆寺にまでいたる、壮大なスケールの東西文化交流の調査が始まった。調査団は、平山郁夫を团长に、日本画（福井寛人、下田義寛）、建築（茂木計一郎）、美術史（水野敬三郎、田口榮一ほか）からなる、美術学部の合同チーム。前年の予備調査から八七年の第三次調査まで、日本の仏教美術の源流とともに、うべき敦煌の、密度の高い学術調査が行われた。

当時、敦煌は急速に変わりつつあった。中国の開放政策を背景に、観光客がふえ、宿泊施設が整い、空港も新たにつくられた。第一次調査団は、砂ぼこりのなかを延々とバスにのって敦煌についたらしいが、八五年の第二次調査団は、できたばかりの敦煌空港に空路で行っている。敦煌研究所も、研究「院」と名前を変えて拡充しつつあった。

合同チームによるこうした学術調査の海外派遣は、この時が初めてではなかった。それ以前にも二回あった。最初は、発見されてまもないトルコ・カッパドキアの岩窟修道院を中心とする、中世オリエント遺跡学術調査団（六六年、六八年、七〇年）。二回目は、イタリア・アッシジの聖フランチエスコ修道院などを中心とする、イタリア初期ルネサンス壁画学術調査団（七三年、七六年）。これらの二回の調査も、それぞれ大きな成果をあげたらしい。ただ敦煌の調査が、前二回の調査と大きく違つて

いたのは、同じ学術調査でも、それが国あるいは政府レベルに近い文化事業として行われたことだった。これは、本学の活動の国際化と、その後の進展からみても、大きな画期となる出来事だった。

この敦煌の学術調査をはじめ、その後の相次ぐ海外の芸術大学との交流提携、ごく最近ではアフガニスタンの戦後復興支援に至るまで、この二〇年間に本学の活動は、国際化が大きく進められてきた。国際貢献を目指したその国際化を一貫してリードしてきたのが、現学長平山郁夫の強いリーダーシップだった。いまや交流提携大学も、世界中の大学二〇校近くになっている。

一九八〇年代なかばから、円が一ドル一四〇円から一〇〇円ちょっとにまで強くなつたことで、日本から海外への旅行や留学は、すいぶん楽になつた。日本への留学には、逆にハードルになつたが、それでも本学への留学生は増え続けている。オアシスに東西の人々が行き交つた敦煌のように、世界中の人々が集つ日も遠くないかもれない。

(たけし・じゅん／美術学部美術学科助教授)

東京芸術大学美術学部1983年 敦煌学術調査 —国際化の進展

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『〈日本美術〉誕生—近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術—美の政治学』がある。



敦煌 (1982年)
(3点とも撮影提供=田口榮一)

タイムカプセルに乗つ



民族楽器「チカーラー」



エスキモーを取材したおりの小泉文夫



「シルクロード・コンサート」のリハーサルの合間に

東京芸術大学音楽学部1985年 民族音楽学・ 楽器学の「宝庫」 一小泉文夫記念資料室の開設 瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。著書に『漱石が聴いたベートーヴェン音楽に魅せられた文豪たち』、主要論文に「東西音楽の接点—音楽におけるジャポニズムの一断面」がある。

1995

一 一九八五年、故小泉文夫教授（一九二七—一九八三）のご遺族から、傑出した民族音楽学者であった故人の膨大な量の楽器コレクションだけでなく、録音テープなどの研究資料が本学に一括して寄贈された。これらを保管整理して、将来の民族音楽学、楽器学の研究にあてるべく設立されたのが、「小泉文夫記念資料室」である。二年後の一九八七年、東京芸術大学創立百周年記念の年にはこの資料室の展示会が行われ、同時に「所蔵楽器目録」が作製された。彼は享年五六歳で病魔に倒れ、現役のさなか突然、冥界に拉致されたような感じであった。逝去されてもう二十一年になる。

世界各地の楽器コレクションの多様さは目録を見ても驚くが、蒐集のありさまは「わが家はじて楽器の『倉庫』」とエッセイにあるほどである。

小泉文夫は戦争中も一高の学生として、比較的のんきな学生生活を送っていたようである。彼にとっては個人の転換期と時代の転換期とが重なったので、振幅の広い生き方になったのだろう。敗戦によって軍国主義が崩壊すると、ほかの青年たちと同じようにひどい虚無感に襲われたが、やがてヴァイオリンをかかえて進駐軍むけのタンゴバンドに加わったり、警察庁の通訳をして生活は確保しながら、民族音楽研究という生涯の仕事を向かい始めた。大学卒業後、一九五六年から二年間インドの音楽大学に留学し、これが小泉文夫にとって決定的な経験になった。『なつかしいインド、大嫌いなインド』といふエッセイには彼の愛情半ばする気持ちがよく出ている。以後、南アジアの首府アーラム、イスラムabad、エジプト奥地をはじめ、五十余カ国を経めぐったのは、彼のトレードマークにすらなった。

来し方を振り返った晩年、このように民族音楽研究に邁進していた日々ですが、彼は「何時でも服飾デザイナーや小説家に転身する可能性を考えていた」と回想しているから面白い。この民族音楽学のバイオニアには教師臭いところがなく、軽快なスマートさが印象に残っている。（たきい・けいこ／演奏藝術センター助手）

いま資料室に収められている品々を、目録を手にしながら眺めて廻るというのは、得難い経験になるだろう。しかしこれらコレクションは、彼の著作に接すると、俄然多くのことを語り始める。たとえばサーランギ、ルバーブ、チカーラーについては「インドのサーランギ」（『民族音楽紀行』所収）というエッセイが絶好の資料である。三九本の弦で「異様な音」を出すサーランギなる弦楽器と、彼がいかにして出会ってその楽器の演奏方法を習ったか。またその系統的に近い楽器のチカーラーを地元の楽器屋からどういう経緯で手にされたか。テンボのいい文章でそれ樂器の話を読むと、樂器はとても具体性を帯びてくる。あるいは別なエッセイ「執念のサン・トゥール」でもいじ。ユーモラスな話しぶりのなかで、歴史の重みのよつたものを感じて肅然としてくる。現在、彼の著作選集は五巻も出している。

教員は語る

—芸大への期待・抱負・提言—

二人の教員を招いて、東京芸大における教育のあり方、学校・学生に対すること、将来への展望などを忌憚なく語つていただく新コーナー。

關根知孝

内佐斗司 篆文



新任の抱負、芸大への期待

関根 能にかぎらず、藝術というものは、何しろ習得するのに時間がかかるものです、しかも一八

歳から二歳くらいの時期には学ぶべきことたくさんあります。謡、舞をどんどん覚えていかないとスタートが切れないこともありますので、古典を学ぶという点で、四年間は吸収するべきとも大切な時期なんです。

なかで芸大を選んだ人に、後悔しない四年間を送

一般教養なども含めて幅広い面で学生生活を送つてもらわなければならぬ。芸大では、
させることがわれわれの務めである。

しまつて いる と 思 い ま す。 しか し、 洋 の 東 西 を 問
わ ず、 両 者 は 総 合 芸 術 の そ れぞれ の パーツ に すぎ
な か つた と 思 う ん で す。

能楽も、能面や楽器、装束をつくる方がいなければ成り立ちませんし、舞台は素晴らしい建築物です。本学には歌舞伎はないようですがれども、能や歌舞伎といった日本が誇る舞台芸術は、美術と音楽が融合したものだつたと思います。

も、学校に馴れてきましたら、そういうことにどんどん取り組んでいきたいと思います。これは、

言うのは簡単ですけれども、実現するのは大変なことですね。

斎内 私自身は、彫刻制作とともに仏像の研究を一生懸命やつておりますが、仏像というのは純粹芸術で、いうところの「彫刻」である前に、仏教という大きな世界のひとつ要素なわけです。私が担当しております文化財保存学も、仏像彫刻の物理的な保存と修理だけというふうに小さくまとまりてしまうと、本当につまらないセクションになります。保存修復を超えて、仏像とのかかわりのなかから、それらが生まってきた世界観や日本人のこころの世界まで興味の対象を拡げていってほしい、と私は学生たちにいつも言っています。そうでなければ、東京芸大の大学院にふさわしい研究にはならないと思います。



斎内佐斗司「水神童子」



斎内佐斗司「直樹」(やぶうち・さとし／なおき)
一九五三年大阪市生まれ。一九七八年東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。
一九八〇年同学院美術研究科保存修復技術研究室非常勤講師(～一九八七年)。
一九八七年台東区橋荷町に工作室を構え、彫刻家として活動を開始して現在に至る。
二〇〇四年現職に就任。

斎内 あまり枝葉にこだわらないで、自分が研究対象に選んだ仏像の奥には広大な世界観があるんだということを、若い研究者は忘れないでほしいと思います。

関根 修復に携わりながら、ご自身の作品の創作の活動もされていて、素晴らしいことだなと思いました。本当にわかっていないければこういう作品は生まれてこない。それを修復の中から本質をつ

とくに法人化して、ほかの芸術系大学との差別化を図り、わが国らしい芸術表現の分野で指導的立場を保ち続けるためには、いろいろ考えていくことがあると思います。たとえば教育課程の講座として新設しなくても、そういう分野を集中的に研究したり、対外的な発信に寄与できるような柔軟な研究機関が必要ではないでしょうか。

関根 邦楽、美術の二つだけにとらわれないものについては必要だと私も思いますけれども、既存

斎内 国民の税金で運営されている本学にもかかわらず、わが国を代表する芸術表現として、本来あつてしかるべき研究領域が抜けているような気がしてなりません。

たとえば茶道とか、さきほど申し上げた歌舞伎などです。また華道、香道や、書道もありませんね。このことについては、外国の友人たちも一様に首をかしげています。もちろん、今までなかつたことについてはそれなりの理由があるのでしようが、これから先も今までいいのか、大いに疑問です。

日本の伝統文化のアカデミズム

かまれたんだということがよくわかりました。



関根知孝（せきね・ともたか）

一九五一年埼玉県生まれ。一九七一年東京芸術大学邦楽科卒業。

一九七一年観世流三世宗家觀世左近（元正）に内弟子入門。一九八一年能楽観世流シテ方として独立。

一九八四年より東京芸術大学非常勤講師を七度にわたり務める。

一九九八年重要無形文化財総合指定を受ける。
二〇〇四年より現職。

の組織のなかでそれを思い描くなれば、どうやつたらいいのかというのが出てきますね。

範内 そうですね。まあそれは、私の夢というか、たわごとかもしれませんのが、大学がそういう意志を持てば、必ずできると思います。新参者の言うことではないかもしませんが（笑）。

関根 でも、そういう思いがあるということは、私もとてもうれしいです。

範内 本学は、わが国の伝統的な芸術表現の分野で、主体的にアカデミズムを構築しなければならない大学だと思います。この点が、ほかの芸術大学といちばん違う点だと思いますし、だからこそ芸大のアカデミズムに対抗するアンチテーゼを私学が創り出す意味もあると思うのです。卒業制作展を見ても、ほかの美術大学との違いがあまり明瞭でないのは、ずっと気になつてることです。

は独創性が非常に重んじられて、完成度は二の次だというような意味のことを書いておられました。若いころ私はこれを読んで非常にショックを受けました。

私たちの能の仕事は、独創性というのは最初に求めるものではなくて、習ったことの完成度を高めていくて、そこから独創性なるものが自然にじみ出てくるものだというような方向だったわけです。範内先生のおっしゃったことで言えば、仏像の修復に携わりながら仏教を学ぶのと同じように、能のほうは、古典を学びながら、ただその形だけを追い求めているのでは話にならない。どうやって能のなかにある精神的なものをつかむかということが大事で、それをつかまなければ独創性は出でこないし、つかみさえすればいくらでも出てくるわけなんですねけれども。

範内 ある意味では、一個人の独創性に対する信仰の時代というのはもう終わつたと思うんです。世界的に、スーパースターと呼べるアーティストが生まれていなくてはいけないのでしょうか。

また私たちが芸大の学生だったころに比べて、日本文化に対する関心がとても高くなつていていふにも感じます。たくさんの若い女性が仏像を訪

ねて歩き、「和」を看板にしたり日本を特集した雑誌がたくさん売れている。現実の暮らしから、日本が消え去る寸前だからこそ、無意識に自分自身を探しているんでしょうね。

いま和楽器をつくるひとたちの現状は大変厳しいですね。芸大に和樂器をつくる科を設けろとは言いませんが、さまざま分野でわが国の芸術表現を支えている人たちがより安心して素晴らしい仕事を残せるような環境を、政策的に提言していく義務が芸大にはあるんじゃないでしょうか。

関根 美術の先生からそういう言葉をおっしゃつていただいて、こちらも努力、働きかけをしていかなければならぬと感じています。たしかに「困つた、困つた」と言いながら手をこまねいているような状態でもあるわけです。

美術・音楽・思想を統合する

関根 日本の文化といえば、邦楽や能というのを、いちばん強く標榜しなければいけないわけですよ

以前に新聞のコラムを読んでいましたら、グラフィックデザインの大家の方が、自分たちの仕事

世界的で、スーパースターと呼べるアーティストが生まれていなくてはいけないのでしょうか。

また私たちが芸大の学生だったころに比べて、日本文化に対する関心がとても高くなつていていふにも感じます。たくさんの若い女性が仏像を訪ねるのも一緒にやることはないものですから、邦楽科の

なかで意見をまとめるにしても、まず理解を得るというのが大変なのです。能のことと言えば、美術のほうともいろいろなかかわりを持たないところないでけれど、芸大にはそういう場があまりありません。



学生を指導する関根知孝助教授

演奏芸術センターと音楽学部の共催で五月に行われた「邦楽アンサンブル」は、今年で三回目ですが、ふだんは別々に舞台上に立っている邦楽科の先生方がそろってひとつの作品をつくるという企画です。一年目が「熊野の物語」、去年は「竹取物語」、今年は「宮沢賢治の宇宙曼荼羅」でした。

これは美術との協力ということで舞台をつくっていますが、協力を得られたから盛り上がったのではないかと思いました。今後さらにどういう形で進めていくことができるか。邦楽アンサンブルという形で行われたわけですから、「芸大アンサンブル」という形で音楽と美術の調和、協調に育つていくならば、たいへんな仕事ですけれども有意義かなと思います。

藪内 音楽と美術、そしてそれらを統合する宗教や思想というトライアングルでひとつ的世界を再び創りあげていくことを志向しなければ、わが国本来の日本の芸術表現は滅びていくと思います。

関根 思想というとかたく固まるような感じがあるかもしれないですけれども、つくった人の思いが音楽家のほうに伝わって、それと調和するような表現が何か生まれればおもしろいと思います。

藪内 そういうふうに、美術と音楽が総合芸術となるためには、それを包み込む思想文化がなければならぬと思います。私の専門領域の仏像も、

佛教文化を理解しなければ成り立たない。お能の場合も、まず中世人の幽玄の世界を理解できなくては、意味をなさないでしょうね。

関根 能もいろいろな側面がありますが、神道によつて救われるものが多いけれども、救われた状態を表現するのではなくて、救われるまでの悩みとか、そこに至る過程がおもしろいのです。私どもでも、ゆくゆくは、藪内先生がおっしゃつたみたいな大きな思想というものに没頭したいのですが、能のほうは、そこまで持つていくのは大変なことだなと思います。先生のほうは、仏像の修復ということで、いやが応でも仏教に真正面から向き合つていかなければいけですね。

藪内 そうなんです。ですから、芸大にも、先端的な表現を追求したり、グローバリゼーションを標榜したりする方々もたくさんいらっしゃって、もちろんその分野も大変重要なことです。本学では、

それと同じくらい日本のこころを探る分野を大切にしなければいけないと思います。今日の対談は、たまたま能楽と文化財保存という取り合せでしたので、そこらあたりが結論になりますね。笑。

岡倉天心の建学の精神に、創作と古典研究という二本柱があつたと思いますが、これをご縁にぜひ関根先生とは、古典の分野での太い柱を芸大のなかに一緒につくりたいけれど願っています。

関根 まず藪内先生と同じ気持ちでありますので、どこまでできるのかということはありますが、自分の力を注ぎがんばってやってみたいと思います。

学長	平山 郁夫
理事(教育担当)・副学長	宮田 兼平
美術学部長	野田 駿行
音楽学部長	六角 鬼丈
附属図書館長	川井 學
大学美術館長	上野 浩道
演奏藝術センター長	竹内 順一
美術学部教授	三林 麗夫
美術学部教授	増村 紀二郎
美術学部教授	池田 政治
音楽学部教授	藤幡 正樹
音楽学部教授	船山 隆
音楽学部教授	守山 光三
音楽学部教授	土田英三郎
事務局長	太田和良幸
美術学部長	太田和良幸
音楽学部長	六角 鬼丈
附属図書館長	川井 學
大学美術館長	竹内 順一
言語・音声トレーニングセンター長	上野 浩道
演奏藝術センター長	三林 麗夫
芸術情報センター長	渡邊 健二
保健管理センター所長	富田 亮平
留学生センター長	根木 昭
附属古美術研究施設長	絹谷 幸一
附属写真センター長	佐藤 時啓
附属音楽高等学長校長	佐藤 真

科の協力を得て展示したもの。なお、美術学部では第一回目から舞台美術、第二回の衣装デザインを担当している。

◆ 大学院映像研究科

設置構想を発表

五月三十一日、大学院映像研究科(仮称)(修士課程)の設置構想について記者発表した。映画、ア

ニメーション及びメディア映像の三専攻からなり、設置場所は、横浜市みなとみらい地区等を予定している。平成一七年度は映画監督

や脚本家などを育てる映画専攻を設置し、その後、順次年度計画に

よりほかの一専攻を設置する予定。詳細は、大学公式ホームページ(<http://www.geidai.ac.jp>)に掲載

(十一月前後予定)。

◆ 芸大初のジャズコンサート、「藝大21時の響き」ジャズコンサート「藝大21時の響き」「ジャズ芸術大」が本学奏楽堂で開催された。出演者は本学教員とわが国ジャズ界を代表する錚々たるベテラン陣、名門ビッグバンドのブルーコーンに加え、本学で代々引き継がれている現役学生バンドのManto Vivoであったこともあり、企画公表直後から問い合わせが多数あるなど反響も大きく、演奏会二週間前にはすでにチケットは完売していた。演奏藝術センターでは、好評であったことを受け、来年度も同様の企画を立てたいとしている。



◆ 芸大初のジャズコンサート、「藝大21時の響き」ジャズコンサート「藝大21時の響き」「ジャズ芸術大」が本学奏楽堂で開催された。出演者は本学教員とわが国ジャズ界を代表する錚々たるベテラン陣、名門ビッグバン

第9号刊行にあたって

東京芸術大学法人化後の最初の芸大通信です。この冊子のニュース欄にご紹介いたしましたような、経営協議会、教育研究評議会、部局長のメンバーと、教員、学生が一団になって、新しい時代の芸術の創造と研究と教育の方向を真剣に模索し始めています。

芸大通信は、これまでの編集方針と紙面作りを踏まえつつ、本学の芸術探求のありかたについて、考え、ニュースを提供してまいります。今回の特集では、<留学生>に光を当ててみました。本学で学ぶ留学生の数は、他は他大学にくらべて多いとはいいませんが、本学のキャンパスで、地球的規模での芸術文化の交流と創造の場がうまれつつあり、上野の杜の狭いキャンパスが、世界にむけての芸術情報の小さな発信基地になります。

上野の杜のなかには、あまり知られていない「名所」があります。今回からの新連載の「芸大の歩き方」でご紹介しますので、おたのしみに。

芸大通信編集長
船山隆

ジャズコンサート「藝大21時の響き」「ジャズ芸術大」が本学奏楽堂で開催された。出演者は本学教員とわが国ジャズ界を代表する錚々たるベテラン陣、名門ビッグバン

◆ 歴史的な横山大観「海山十題」展開催

七月二十七日から八月二十九日まで、横山大觀「海山十題」展を大学美術館で開催した。

近代日本画壇の巨匠・横山大觀(一八六八～一九五八)は、昭和十五年(一九四〇年)に、自らの画業五〇年と紀元二六〇年の記念として、「山海」十題(通称「海山十題」という)十幅の連作を描いた。昭和十五年四月に、「海に因む十題」と「山に因む十題」が別会場で公開され、以降、一部が所在不明となつてしまつたものが最近になって発見されたことにより、一堂に会することができたもので、歴史的な展覧会と謳われた。

期間中の入場者数は約九万八〇〇〇人。八月十一日には桂宮宣仁親王殿下がご覧になりました。

主催・東京芸術大学、NHK、

NHKプロモーション、協賛・D

NP大日本印刷、三井住友海上火

災保険株式会社、協力・横山大觀

記念館。なお、本展は足立美術館

(島根県宍道市)に巡回した。

◆ 音楽担当教員への伝統音楽研修会を開催

文部科学省と東京芸術大学は、音楽担当教員で都道府県における音楽教育の指導的立場に立つ十二日で開催した。この研修会は、音楽担当教員で都道府県において音楽教育の指導的立場に立つ者に、学習指導要領の趣旨を踏まえて日本の伝統音楽についての研

修を行い、学校での音楽教育の改善・充実を図ることを目的として実施されたもので、本学は実技研修を担当した。

実技研修は、邦楽科教員の指導で都道府県等教育委員会の音楽担当指導主事、国公私立の小中高等

学校等の音楽担当教員約一九〇名

が参加して、箏、尺八、三味線、

邦樂譜子(打楽器、篠笛)の和樂器などに行われた。

